
東方夢見録

雪太

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方夢見録

【Nコード】

N6957T

【作者名】

雪太

【あらすじ】

これは幻想郷を夢見た少年の物語

少年は何故自分に能力を保有しているかを知る

彼は幻想郷で生きて行けるのか

東方は二次創作を許可された題材であると明記したいと思います

オリ主が出ます

キャラ崩れが出るかも知れませんが気にしない方だけ読んで下さい

この作品は小説家になろうに初投稿の作品です

原作を作者なりに、出来る範囲で書かせていただきます

因みにこの作品は作者の自己満足を満たしたりしている可能性がありますのでご了承下さい

ではでは開幕

幻想郷を夢見た少年（前書き）

俺は夢を見ていると思う

やけに現実味がある

多分どこかの森に開かれたような場所だ

気が付くと目の前には尖んがり帽子を被ったエプシロンドレスのよ
うな服を身に纏い、幕を持った少女がいた

少女は

「……………」

無言のまま近づいてきた

幻想郷を夢見た少年

少女に

「君は誰だ？」

と、聞いたが少女は答えない

「俺は罪を犯した、何者にも許しを乞おうとも許されない罪を犯したんだ

君は自分が危機的な状況に陥り、他人を見殺しにしにしなければならぬ時

見殺しにした自分を許せるか」

少女は答える

「そんなもの気負う必要なんか無いと思うぜ」

少女は女性らしくない口調で気兼ね無く、客観的に答える

「俺も許すけど業は背負うよ、それは俺が招いた事だから」

「この世界ではそんなのは一切関係しないぜ」

俺は言葉を詰まらせる

「お前が気負うんだったら、私に背負わせてくれたら

」

ジリリリリツと目覚ましがベルを鳴らす

「……………夢か？」

俺は神谷 諒

昔、紫さんと言う女性に魔導書を買い

それから数年間は研究や実践の繰り返し、魔術と魔法を幅広く、浅くも無く深くもない程度に会得した

が、ある事件をきっかけに俗世から逃げた

俗世から離れた十五歳の時に放浪の旅に出たんだ

その旅の途中に出会ったのが俺に武術を指南してくれて、心を鍛えてくれた恩師である

魂魄 妖忌、浴衣に仁平を羽織っていて白髭を蓄えたお爺さんで

彼には感謝してもしきれない位にお世話になった

現在とはある理由で実家に帰っている

父と母は置き手紙を残していた

「探さないで」

探さねえよ、あんた達なんて

実を言うと両親とはほぼ絶縁状態なのだ

俺は部屋からリビングに降りると

「あら、お目覚めね」

肩口の開いた西洋風の服を着た女性が堂々と人の家の食料を食べていた

「……………お久しぶりです、紫さん……………」

紫さんは確か……………来客用の茶碗を使い白飯をパクパクと食べながら言う

「ん、やっぱり出来上がってるわね」

「人を物みたいに言わないで下さい」

紫さんは「お替わり」と言って従者らしき九尾の女性に茶碗を渡す

「藍、やっぱりいいわ」

俺は紫さんの前に座る

「いきなりだけど君は

幻想郷に行きたい？」

俺は紫さんに

「ええ、俺は今も昔も幻想郷に憧れ、毎日鍛練してきました

……もしかして紫さんが妖忌老師を引き合わせたのですか？」

「あら、妖忌が居たの？」

どうやら紫さんは知らなかったらしい

俺は空いている席に座る

「じゃあ紹介するわね、この子は藍、私の式よ」

「初めまして、紫様からは度々噂は聞いている

……確かに幽鬼丸とどっこいどっこいね」

俺はその幽鬼丸と言う奴を知らないが

「紫さん、俺はあれを家族とは思えない

だから……俺を誘ってください」

紫さんは

「分かったわ

だけど、本当に良いの？」

「ええ、構いません」

俺はそついうと部屋へ戻り荷物を取りに行った

俺は先ず、紫さんから貰った魔導書をポストンバッグに詰め込む

その後は縦約1・4メートル、横幅3メートルで厚さは約1メートル半のアタッシューケースにフラスコに試験管、スポイト、ピーカー

を10本ずつ、チベット産の薬草、蓬莱人参、イモリの目玉やら何やらを詰めた瓶を20本近くアタツシユケースに入れた

そして、妖忌師匠に貰った何着かある衣服のうちからジーンズと黒色のTシャツと白のカッターシャツを着て、革製の丈が長く長身の部類に入るであろう俺でも地面に着いてしまいそうなコートを羽織り残りの衣服をもう一つのボストンバッグに入れて

「後は……」

俺はこの日が来る事を見越し妖忌に頼み保護者と言う事にしてもらい

アルバイトをしていた

それが今や二百万円位をこの為に貯めていた

自分でも驚いている

「よし、行くか……」

俺はもう二度と使うことの無い部屋へ感謝を贈った

紫さんは驚いたように荷物をまじまじと見てくる

「流石にここまで荷物を持っていると逆に爽快感を感じるわね」

「そうですか？」

俺は荷物を見ながら

「これぐらい持っていないと研究や魔導書製作に色々と響きますから……」

紫さんは溜息を吐きながら

「まあ良いわ、それじゃあ……」

一名様、ごあんなうい

「

下からスキマが現れ、俺は落ちて言った

幻想郷を夢見た少年（後書き）

はい、今回は主人公が幻想郷に行くと言っ内容です

作者も日々精進しますので

よろしく！

魔理沙と紫の雇用協議（前書き）

私、八雲　紫は彼を頼めるであろう人間を訪ねるためにスキマを創り魔法の森に来ていた

「流石に夜だと暗いわね」

と、私は傘を回しながら歩く

今日は大事なあの子の運命が関わっている日……

だからスキマを使わずに歩いていく

私は扉のベルを引き鳴らす

「はぁーい、つて誰だ？」

こんな夜更けに……

つてスキマ妖怪かよ」

「随分な挨拶ね

それより中に入れてくれない？

胞子で服が黄ばんじゃうわ」

「……まあ、後々しつぺ返しされても堪んないぜ

ほら、入れよ」

私は少女の家へ入って行く

魔理沙と紫の雇用協議

黒いエプロンドレスのような服を着て、尖んがり帽子を被った少女が紫に

「……で、私にそんな話を持ち掛けたんだ？」

そう言うのは霊夢に任せれば良いと思うぜ」

と、少女ははっきりと拒否をしたが紫は何故か食い下がる

「魔理沙あ、お願いよお」

彼は魔法使いの才能が在るわよお」

と、猫撫で声で魔理沙と言う少女に頼むが

「却下だぜ!!」

紫は少し考えた後、手を前で合わせ

「なら、弾幕ごっこで私が負けたら諦めるけど……」

魔理沙が負けたら彼を雇ってあげてくれる？」

魔理沙は思考した

（この状況で私が勝てばそんな得体の知れない奴を雇わなくて済むし……

でも、紫に負けたらそれこそ本末転倒だぜ

………よしっ）

魔理沙は思考をやめて結論をだした

「良いぜ、その条件を呑んでやるぜ

だけど、紫が負けたら…

そいつの話は無しで」

紫は「分かったわ」と言い距離を空ける

紫は妖気を体から溢れんばかりに出す

（紫が珍しく本気だぜ

勝てるか分からないけど

面倒臭い事は他人任せて

私は気ままに人から物をぬす、借りていくだけだぜ！！）

魔理沙はポケットから六角形の板を取り出した

「先手必勝だぜ、恋符「マスタースパーク」！！」

魔理沙の周りに魔力が集まっていき、板に魔力が満ちた瞬間

極太のレーザーを発射した

「ふふ、相変わらず力任せのスペルカードね」

紫は余裕を見せたかと思うとスキマを創り、魔理沙のスペルカードがスキマに入って行く

「でも……」

今回は貴女の負けよ魔理沙

私は本気できてるのよ

貴女が勝てる訳無いわ

」

紫は魔理沙の頭上にスキマを再び創り出した

「え……………」

魔理沙は何かを察知し上を見たが既に後の祭

魔理沙の頭上に閃光がほとばしった

「うあああ——」

森の中から魔理沙の叫ぶ声が聞こえた

魔理沙と紫は魔理沙宅にいた

魔理沙は服が所々破けたり、焦げたりしていた

「…………で、誰だよそいつ」

「あら、気になっちゃう？」

と、紫が聞く

魔理沙は「べ、別にいい、気にならないぜ」と言った

「でも顔には知りたいって書かれてるわよ」

魔理沙は、ふんつと言いつて腐れていると

「はい、彼の履歴書（紫作）」と言いつて紙の束を手渡した

魔理沙は履歴書を見ながら紫に

「…………スキマ、お前はアレか？

シヨタか？」

紫はニコニコしながらスキマを創ろうとしていた

そんな紫の姿を見て魔理沙は身の危険を感じたのか

「わあああ！！、待て待て、嘘だから嘘！！」

紫は少しムスツとしながら

「その子の写真、14年前よ」

魔理沙の思考が停止した

「えええ！！。」

じゅ、14年前!!」

「ええ、貴女と同年よ」

魔理沙は再び驚いている

「因みにさっきのシヨタ疑惑であの鴉が来たけど……」

紫はスキマから写真を取り出した

「うげっ!!」

そこには縄でグルグル巻にされ木に吊されていた

「こんな事になるわよ」

と、言いスキマになおした

「で、雇う件は？」

魔理沙は鴉天狗並の速さで土下座をして

「雇います、雇わせて下さい!!」

しかし、魔理沙は心の中で

（あああ、面倒臭い事になったぜ

……！！

使いつパシリにすれば

パチエから本を死ぬまで借りれるし、暴走したフランからも逃げる
要員としても……

）

と、思惑を頭の中で巡らせていた

魔理沙と紫の雇用協議（後書き）

と、言う訳で第二話でした

何となく書いていて分かったのですが……

文才無えーーーー！！

湖畔の氷精達は魔術師と出会う（前書き）

俺は今、スキマの中を歩いている

中では瞳が俺を見てくる

「紫さんはこんな所を通って来てくれたのか……」

スキマの向こうから光が射している

「そろそろだな、でも……何処に行こうか……」

俺は今の問題を口から小声のように出してスキマから出た

湖畔の氷精達は魔術師と出会う

俺は少し歩きながら何処かに向かおうか模索していると

後ろから突如として尖った氷のツブテが降ってきた

俺は簡易魔導書から妖忌から貰った刀を召喚し、氷のツブテを弾く

「いきなりとは関心しないな……」

そこに居たのは水色の髪に半袖タイプのワンピースを着た少女がいた

しかし、彼女から発する冷氣と羽が人外である事を窺わせる

「ウルサイわね、アンタがあたいのナワバリに入ってきて来るから悪いのよ」

俺は後ろを見ずにその場を後にしようとする

少女は

「ちょ、なんで無視しようとするのよ!!?」

俺は

「行くあてが無いので……、だから妖精相手に遊んでいる隙は無い……」

俺は回りを見回す

すると微かだが、湖の真ん中に浮かぶ紅い屋敷が見えた

あそこなら今日の宿として頼めないか交渉出来るかもしれない

移動しようとした、その瞬間

「待ちなさいよ、もおー頭に來た、氷符「アイシクルフォール」！
！」

頭上から氷の弾が降ってきた

「流石にこれは……」

俺は魔導書から紙を取り出した

「守護法陣……！」

地面に投げた札から結界が出てくる

さて、防いだのは良いが……

「動けん……」

動けなくなっていた

この守護法陣は魔導書を創っている途中で出会った陰陽術の結界だ
どんな攻撃から自身を守る事が出来る自信作だが……

欠点を上げるなら、術者……つまり自分は魔力を地面から介して札に
送らないといけないし

何より魔力を馬鹿食いするからである

（相手は妖精であれ少女……、やり辛さはかなりあるな……）

「はぁ……、仕方が無いよな……」

俺は刀を再び召喚する

「妖忌師匠が俺向きに考えてくれた剣術……」

魔剣、壺の型 水辺に映る華

「

俺は刀に魔力を錬度高く、そして薄く纏わせる

「少しの間眠ってくれ…」

刀で少女を斬った、が実際は峰打ちだ

この妖精は消滅せずに済んだ

「その妖精、

そろそろ出て来てくれないか？」

その瞬間、可愛いらしい声で「ふえっ」と聞こえた

さっきの氷精とは雰囲気が違う、緑の髪をサイドポニーにした妖精が木の影から出てきた

彼女が妖精としてはかなりの力を有している

「チ、チルノちゃんは大丈夫なんですか！！？」

「妖精、君の友達であるこのチルノは気絶しているだけだ……」

しかし、さっきの面妖な符術と言い……

あれは何なのだ？」

妖精はさっきの面妖な札を取り出し

「こ、これはスペルカードと言ってこの幻想郷の揉め事や異変解決、弾幕ごつこの時に使われる言わば“必殺技”みたいなものです

あ、申し遅れました私は大妖精です」

妖精……大妖精は自己紹介と面妖な札、スペルカードの説明をしてくれた

「……さっきは済まないな、

君の友達を切るような真似をしてしまい」

大妖精は手をブンブンと振り

「い、いえ、止めれなかった私にも過失はありますし……」

今にも泣き出しそうな彼女の頭を俺は優しく撫でた

「嫌、君が謝る事ではない

だから気にするな」

俺は簡易魔導書に刀を戻しながら大妖精に視線を戻す

「チルノには君から謝ってくれるか？」

と、言う俺の願いに大妖精は

「はい、分かりました!!」

俺は「機会があればまた来る」

と、言い紅い館に近づいていく

湖畔の氷精達は魔術師と出会う（後書き）

この回はあまりしつかりと戦闘描写が出来ていたか不安なので順次改善していきますので

よろしく願います!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6957t/>

東方夢見録

2011年10月9日01時40分発行